

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	焚殺美學
Author(s)	松尾, 勝敏
Citation	龍南, 198: 33-34
Issue date	1926-07-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8853
Right	

焚殺美學

松尾勝敏

街燈の匂が

とほい濕林のなかにいんきなはれもののやうに湧き立つてゐる

赤い喪服をつけた蛇薺の舌のうへを

息をひそめ　じりじりと煙のやうに這いまはる青蛇の眼光り

めじめとした精蟲散樂の蒼溟をかんじてゐる

ああ　あはれにもえんえんとしてこころの陰影をなめまはす黃炎の匂よ

深夜はかなき青蚊^{かや}張のなかにいつぼんの黃色なるろ、う、そ、く、をともし

ころはなめらかなる栗の花のしんぴなる神經までもすべりゆく

しだいにもほんぼんとして流れいづる情火^{おもひ}を發散し

青かやのなかに昆蟲の命をぬすむ

單調な音と匂を落してゆく蚊群のしゆくめいに

またもあやしき十字架上の焚殺美學のあくことなき色彩を戀ふる狂人である
四角なこの綴張のなかに

生々滅々のぶんめいの昏睡をもく殺し

信仰と倫理學の破戒に青ざめた頭蓋骨が

黄色いろうそくをともして

しよぼしよぼとさびしき焚殺美學を食べてゐるのです

とほく針葉樹林の枝々にはりつけにされ、

首くくる月の

有機的生命の悶絶をかんじ

宇宙草昧のどろどろした感情に

人間發生の昏迷をくみ立てやうとする

さびくれた無人列車の窓に映る

男・女の死臘を黄色いろうそくの單色で印刷して行く

(附言、編輯者の言によりやくざなる詩一篇を以て委員としての責をべんず)